

THE MECHANISM OF RESEMBLING

花房太一

死のオートポイエーシス村山悟郎

オートポイエティックな制作から生まれる麻ひもを使った作品群で、世界で活躍する村山悟郎は、“THE MECHANISM OF RESEMBLING”のために、映像作品を制作した。

i phenomenon of the bubble gum》で、必死に風船を膨らませようとするサングラスの少年。彼はガイダンス通りに、自らの唇や歯を、不器用に動かす。わたしたちは、いつから風船ガムをふくらませられるようになったのだろうか。そう言えば、最近、風船ガムを噛むことなどめったになかった。前に風船ガムを膨らませたのはいつだっただろう。はるか昔に膨らませたあの感覚を頼りに、イメージしてみる。きっと、あなたは風船ガムをきれいに膨らませられる自信があるだろう。

このように、長いあいだ行っていなかった行為でも、ガイダンスや指示書なしに、何を考えることもなく、行為できてしまうことを、身体知という。たとえば、あなたはいつ自転車に乗っただろう。それが10年前だったとして、おそらくあなたは自転車に乗ることができるだろう。) 歳のときに、初めて、自転車に乗れるようになるまで、幾度となく擦り傷を作り、泣きながら練習したのに、なぜ、10年間も自転車に乗っていなかったのに、難なく乗れるか。それは、自転車に乗るという知(ち)が、脳によって認識されるのではなく、身体に記憶されているからだ。だから、これらを身体知と呼ぶ。

しかし、実のところ、本当に風船ガムの膨らませて方を知っているのは、わたしの身体ではない。ガムの膨らませ方についての記憶を持っているのは、ガムそれ自体なのだ。そして、わたしたちはガムの身体に、自らの身体を結合する。そのとき、ガムがわたしの身体であり、わたしの身体がガムになる。あるいは、ガムが私を膨らませているのだ。したがって、わたしの身体はいま、文字通り、外側に膨らんだ。

ここまで読んできたあなたは、煙に巻かれているような気がしただろう。しかし、考えてみてほしい。なぜ、あなたがガムでないと言い切れるのか。なぜ、あなたが自転車でないと言い切れるのか。あるいは、なぜガムがあなたではないと言い切れるのか。一体、あなたの身体はどこから、どこまでなのか。

それでも、あなたはまだ疑問に思うだろう。わたしたちの身体は生きてはいるけれど、ガムや自転車は生きていない。もし、わたしたちがガムや自転車になってしまえば、わたしたちは死んでしまうのではないかと。

たしかに、そうだろう。ガムも自転車も生きてはいるとは言えない。しかし、たとえ、それらが死んでいたとしても、なぜ、そこに切り閉じられた生命があると言い切れるのだろうか。

オートポイエーシスの理論では、生命はインプットもアウトプットもなく自生している。それならば、ガムや自転車にだって、オートポイエーシスはあるに違いない。たとえ、それらが生きていないもの、死んでいるものであっても、そこには死のオートポイエーシスが在る。

したがって、問題は次のように更新され“。わたしの身体とガムは、どのように似ているのか。

生のオートポイエーシスは、死のオートポイエーシスにそっくりだ。